＜参加者の感想＞

大阪府Ｓ市のセンター校で勤務しています。今回は貴重な研修に参加させていただき、ありがとうございました。Ｓ市のセンター校では来日してすぐの日本語が全く話すことのできない小１から中３までの児童生徒を、週２回通級生として生活言語の指導をしています。

センター校では日本語の話せない児童生徒が約２０人、3 時間の日本語の勉強をしていて、休み時間は母語は違うのですが、一緒に遊ぶなど、楽しくリラックスして過ごしています。しかし、時々在籍校の方から、子どもの様子について、授業に参加したがらない、孤立している、などの心配な相談があります。今日の研修で、子どもの作文を紹介していただき、子どもたちはいろいろな思いを持って学校生活をしているのだと、あらためて実感しました。センター校の指導は約１年間ですが、自分の伝えたいことを伝えられる、相手の言うことを理解する、ということができるようになるよう、しっかりと日本語指導やらねばと思いました。

子どもの日本語指導については、テキストや教材が少なく、大人の教材を子ども用に作り替えたり、子どもが楽しめる日本語のゲームを考えたり、まだまだ手探りの状態です。しかし、まったく日本語が話せなかった子どもが、どんどん話せるようになったり、読み書きができるようになって、教室の授業に参加していく様子をみていると、やりがいを感じます。

生活言語が身についた後は、Ｓ市ではクラスのみんなと一緒に授業で勉強をします。学習言語の取り出しは最小限にし、授業を工夫することでみんなといっしょに学べることが目標です。

クラスでの異文化間理解の取り組みの促進や、外国人児童生徒に母語や母国の文化を大切にすることを伝えるなど、学校の役割はたくさんありますが、今日の研修でお話があったように、関わる教員や日本の子どもたちも一緒に成長していければと思います。　（Ｓ市センター校教員 A さん）

＜参加者の感想＞

齋藤先生のお話の中で特に印象に残ったのは、「ベリーの心理的文化変容の『統合』の段階に至るまでを日本語教育で実現したい」と、「低年齢で来日した子には、母語や日本語で深層面を刺激する必要がある」という言葉でした。

前者に関しては、異文化間教育と日本語教育を融合した教育モデルが構築されれば、年少者にとどまらず、留学生や就労者等に対する日本語教育にとっても大いに参考になると思います。また、後者に関しては、後半に紹介されていた実践事例にあったように、児童、生徒のモティベーションを高めるためにさまざまな工夫がなされていることがよくわかりました。そして、それが CEFR で示されている複言語能力と複文化能力の向上につながるのではないかと思いました。

多様な言語文化背景を持つ子どもたちはこれからの日本を形成していく存在ですが、日本語教育に携わる者には、多文化共生社会の実現という大きな役目があるということについてあらためて考えるいい機会となりました。　（文責：惟任 将彦）

関西大学外国語教育学会 第 18 回研究大会

【日時】 2024 年 3 月 23 日（土）13:00～16:00（受付開始：12:30～、総会 16：00～）
【会場】 関西大学千里山キャンパス岩崎記念館 4F と Zoom によるハイブリッド開催
【参加費】 無料（会員） 1,000 円（非会員）

テーマ

外国語教育学の知見を教育に応用する

＜基調講演＞

講師：山根 繁 先生

（本学会会長、関西大学大学院外国語教育学研究科・同外国語学部教授）

山根先生は、長年、音声学の見地から英語教育の発展・人材育成に寄与され、多くの優秀な人材を世に送り出してこられた。残念ながら今年度で本学会の会長を退任されるが、退任されるに際し、役員一同これまでいただいたご支援に心より感謝する次第である。

今回、最初で最後のご講演となったが、外国語教育学の理論に基づいたリスニング，スピーキング，発音の指導の方法についてお話しいただいた。主な内容としては、１）英語の場合、スペルと実際に発音される音とが著しく乖離していることがあるため、正しく聞き取るためには正しい音韻表象を記憶している必要がある。２）リピーティング、シャドーイング、ディクテーション練習をすることにより、正しい音韻表象を長期記憶に蓄えることができる。高い音韻記憶力を持った学習者は、リスニング能力も高くなる。特にシャドーイングはその効果が高く、リスニング力の向上を図れる。３）言語種を問わず授業では音読活動を行うが、単にテキストを読み上げさせるだけの活動は無意味である。音声分析ソフトを利用して視覚化して見せるなどして、明示的な発音指導が必要である。４）音読活動では、認知負荷を高める活動を行うべきことなど、先行研究からの知見や、山根先生の実践例を交えてお話いただいた。

＜ワークショップ＞

そこに使いやすさはあるんか？

－オンライン実験ツール Gorilla Experiment Builder の紹介

講師：黒木 祐輔 氏（関西大学大学院外国語教育学研究科博士課程前期課程）

「Gorilla Experiment Builder」というオンラインで実験を行うことができるツールの概要と使用例を紹介いただいた。このツールのメリットは、コーディングなどの専門的な知識がなくても、実験課題の作成とデータ収集ができることとのお話で、解答する際の反応速度が把握できるという説明に対して、フロアから「それはいい」という声があがった。心理学の分野では、既に数多くの実験で使用されており、Gorilla Open Materials というサイトで結果が公開されているとのことである。

＜外教学会 研究部会による活動報告＞

1. 外国語学習における暗示的指導 研究会
2. 異文化理解 研究会
3. AI と外国語教育 研究会